

平成 21 年 6 月 11 日現在

研究種目： 基盤研究（C）  
 研究期間： 2006～2008  
 課題番号： 18520557  
 研究課題名（和文）  
 世界大戦、ロシア帝国の崩壊とグルジア・メンシェヴィキに関する史的研究  
 研究課題名（英文）  
 The World War, Collapse of the Russian Empire and the Georgian Mensheviks:  
 Historical Study  
 研究代表者  
 高橋 清治 (TAKAHASHI SEIJI)  
 東京外国語大学・外国語学部・教授  
 研究者番号： 30126106

## 研究成果の概要：

本研究はロシア革命＝内戦において重要な位置を占め、ユニークな軌跡をたどったグルジア・メンシェヴィキの歴史的研究を課題とする。世界大戦から革命＝内戦期、グルジア共和国期にメンシェヴィキの諸潮流が戦争と革命の問題をめぐるひろげられた論争、意見の分岐を歴史的に考察し、そのなかでのグルジア・メンシェヴィキの役割と位置を明らかにする研究を進めた。

『グルジア・メンシェヴィキ（論文と史料）』に収めた論文「戦争と革命 ズラボフとツェレテリをめぐる」では、第二国会の社会民主党会派議長であり、流刑先のシベリアで革命的祖国防衛主義をとなえ、1917年5月連立政府形成の中心となるツェレテリにたいし、グルジア選出の同国会議員であったズラボフ（アルメニア人メンシェヴィク）に焦点をあて、彼の連立政府形成についての議論、状況認識を縦系にして、ツェレテリの主張を再検討し、メンシェヴィキ諸潮流にとっての戦争と革命の問題をあらためて考察した。

## 交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,700,000	0	1,700,000
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	540,000	4,040,000

研究分野： 人文学

科研費の分科・細目： 史学・西洋史

キーワード： メンシェヴィキ ロシア革命 グルジア 民族 第一次世界大戦 アルメニア

1. 研究開始当初の背景

ソ連期に永く封印されていたアルヒーフ

(文書資料館)のメンシェヴィキ関連の史料について、ロシアでの封印解除の進展、注目すべき史料集の刊行など、近年の新しい史料状況をふまえて、それまでの研究の蓄積、準備の上に本研究計画を作成した。

## 2. 研究の目的

世界大戦のただなかロシア帝国は深刻な危機を迎え、革命にいたる。ロシア帝国南部に位置し、諸民族が複雑に錯綜した地域ザカフカスでは、革命=内戦はきわめてユニークな展開をたどる。

首都の十月革命にたいし、11月グルジア・メンシェヴィキは、アゼルバイジャンのムサヴァト、アルメニアのダシナクツチュンなどの民族諸党派とともにザカフカスの地方権力を掌握し、ザカフカス委員部を形成した。トルコ軍の侵攻を受けて、1918年4月民族諸党派は論争の末にザカフカス連邦共和国の独立を宣言した。しかし列強の軍事干渉と内部矛盾の深刻化により、わずか一ヶ月で解体、三つの民族共和国に分裂した。これらの民族共和国は内戦期にソヴェト・ロシアと激しく対立した。しかし、20年4月にアゼルバイジャン、11月にアルメニアがソヴェト化され、21年2月グルジヤもソヴェト化された。

本研究が考察の対象とするのは、このグルジヤ共和国(1918年5月-1921年2月)の政権を握ったグルジア・メンシェヴィキである。

グルジア・メンシェヴィキは、ロシア帝国のメンシェヴィキ党全体の歴史の中で重要な位置を占めている。1903年メンシェヴィキとボリシェヴィキの対立発生当初から、グルジヤは帝国の中でメンシェヴィキの最大拠点の一つとなり、1905年革命後に成立した国会ではメンシェヴィキの独占的牙城となってきた。1917年段階で首都の労兵ソヴェトとメンシェヴィキ党の中央指導部を占めていたのは、ツェレテリ、チヘイゼなどのグルジア・メンシェヴィキであった。首都の十月革命によってソヴェト・ロシアが成立すると、上記のように、1918年5月グルジヤ・メンシェヴィキはグルジヤ共和国の独立を宣言し、11月にはグルジヤ社会民主党という独立の党を形成するにいたる。それは、グルジヤの党内でも、ロシアのメンシェヴィキ党中央との間でも激しい論争を巻き起こした。1921年2月ソヴェト・ロシアの赤軍の侵攻を受け、3月メンシェヴィキ政権は亡命する。

本研究はロシア革命=内戦において重要な位置を占め、ユニークな軌跡をたどったグルジア・メンシェヴィキの歴史的研究を課題とする。世界大戦から革命=内戦期、グルジヤ共和国期にメンシェヴィキの諸潮流が戦争と革命の問題をめぐるくりひろげた論

争、意見の分岐を歴史的に考察し、そのなかでのグルジヤ・メンシェヴィキの役割と位置を明らかにする。グルジヤ・メンシェヴィキの軌跡と彼ら自身の時代認識を考察し、多民族帝国ロシアにおける革命=内戦の構造を歴史的に解明することを目的とする。

## 3. 研究の方法

(1) 歴史的な研究。とりわけ、近年アクセスが可能となった新たなアルヒーフ史料などの検討に重点をおく。

(2) メンシェヴィキ党全体に関する従来の内外の研究は、ボリシェヴィキとの対立、闘争という枠組にあまりにもとらわれてきたし、ロシア中央の政治過程にのみ関心を向けてきた。メンシェヴィキは多様な要素を抱え込んでおり、諸潮流の主張を考察すべきであり、ロシア中央のみならず、地域的ファクターも重要である。

またメンシェヴィキ運動におけるユダヤ人の役割はしばしば強調されるが、グルジヤ人の占めた位置とその意義は解明さるべき歴史的な課題である。

これは、多民族帝国の政治運動における民族的ファクターの役割の評価にかかわる問題である。

## 4. 研究成果

(1) 世界大戦から革命=内戦期、グルジヤ共和国期にメンシェヴィキの諸潮流が戦争と革命の問題をめぐるくりひろげた論争、意見の分岐を歴史的に考察し、そのなかでのグルジヤ・メンシェヴィキの役割と位置を明らかにする研究を進めた。

3年間の研究で、特に以下の諸点について考察を深めた。

世界大戦の勃発とメンシェヴィキ諸潮流  
ツェレテリの首都帰還と「革命的祖国防衛主義」路線の主導権確立  
四月危機と第一次連立政府  
メンシェヴィキの全露五月協議会  
ジョルダニヤの連立批判  
ツェレテリと十月革命  
ジョルダニヤとザカフカスの革命  
グルジヤ民主共和国の独立  
グルジヤ民主共和国とソヴェト・ロシア

(2) 最初に史料の調査、収集について述べておくと、

初年度と二年目の秋のモスクワの二つのアルヒーフ文書館での研究と、  
ハーヴァード大学ホートン図書館所蔵のメンシェヴィキ・グルジヤ亡命政府のコレク

ション Georgian Archive のマイクロフィルムでの収集が特筆される。

後者に関しては、ホートン図書館が必要条件として求めたグルジア国立歴史アルヒーフからの複製許可状の取得について、グルジアの歴史家の多大な協力をえた。これはグルジア・メンシェヴィキの軌跡と彼ら自身の時代認識を考察し、多民族帝国ロシアにおける革命＝内戦の構造を歴史的に解明する研究にとって第一級の史料である。

(3) グルジア・メンシェヴィキの軌跡と時代認識を考察するにあたって、ツェレテリとジョルダニヤがまず問題となる。ジョルダニヤは 90 年代カフカス最初の社会主義グループを結成した第一世代、ツェレテリは第二世代に属する。グルジアは、1903 年以来メンシェヴィキの最大拠点の一つとなり、1905 年革命後に成立した国会ではメンシェヴィキの独占的牙城となってきたが、その第一国会ではジョルダニヤが、第二国会ではツェレテリが社会民主党会派の議長をつとめたのである。

1914 年世界大戦が勃発し、戦争と革命の問題がメンシェヴィキの諸潮流の間でも大きな論争点となった。シベリア流刑中のツェレテリは国際主義の「シベリアのツィンメルヴァルト派」を率いたが、二月革命後は「革命の防衛」を掲げ「革命的祖国防衛主義」をとらえた。1917 年 3 月後半首都に帰還した彼は、この論争でカリスマ的な影響力を発揮し、「革命的祖国防衛主義」路線でペトログラート労兵ソヴェトとメンシェヴィキ党の主導権を握った。

外相ミリュコフの覚書に端を発する戦争問題をめぐる四月危機を経て、5 月第一次連立政府が形成され、ツェレテリはこのメンシェヴィキ党の大転換を自ら体現し、ソヴェト側の代表格で郵政相として入閣した。

『グルジア・メンシェヴィキ(論文と史料)』に収めた論文「戦争と革命 ズラボフとツェレテリをめぐって」では、このツェレテリにたいし、グルジアのチフリス市選出の第二国会議員であったズラボフ(アルメニヤ人メンシェヴィク)に焦点をあて、彼の連立政府形成についての議論、状況認識を縦糸にして、ツェレテリの主張を再検討し、メンシェヴィキ諸潮流にとっての戦争と革命の問題をあらためて考察した。

ズラボフは、連立政府形成直後にチフリスで報告を行ない、それを冊子として刊行している。ズラボフは、二月革命後のロシアの政治状況を分析して、戦争問題、対外政策をめぐる不可避的な対立の構造を指摘し、連立政府形成を対立激化の状況に迫られたやむをえざる選択として受け入れるとともに、第二

国会での旧知の僚友ツェレテリが「ツィンメルヴァルト派」であるからこそ、積極的に評価し今後に期待を寄せるのだということを書き返し強調している。

首都帰還直後にソヴェトとメンシェヴィキ党の主導権を掌握したツェレテリのほうは、3 月末-4 月初めの全露ソヴェト評議会の時点ですでに連立路線に実質的に大きく踏み込んだ状況認識を示している(シベリアの同志であったダンの発言と比べても、その姿勢の違いは明白である)。

グルジアにあってザカフカスの政治状況を主導していたジョルダニヤは、この連立に強く反対した。ジョルダニヤに激しく批判された首都の党中央指導部のツェレテリ、チヘイゼもまたグルジア人であった。

(4) グルジアを基盤として活動したズラボフというアルメニヤ人メンシェヴィクの状況認識、活動を、歴史的考察に組み込むことによって、グルジア・メンシェヴィキの歴史的位置をより深く浮彫りにすることができたのは大きな成果である。

それは、その後のグルジア共和国期のグルジア・メンシェヴィキの指導者ジョルダニヤと党内反対派ズラボフの論争、対立についても同様である。

首都の十月革命にたいし、1918 年 4 月ザカフカスの民族諸党派はザカフカス連邦共和国の独立を宣言したが、一ヶ月で解体、三つの民族共和国に分裂した。グルジア・メンシェヴィキは、5 月グルジア共和国の独立を宣言し、ドイツと協定を結んで、まもなくドイツ軍が進駐した。11 月にはグルジア社会民主党という独立の党を結成した。

この内戦期の政治路線、独立党結成をめぐって、グルジア党内で激しい論争があり、ロシアのメンシェヴィキ党中央との間でも鋭い意見の対立が起こった。

ズラボフは独立党結成に反対する党内反対派の主要人物として、ジョルダニヤに名指しで批判されている。

1918 年末のロシア社会民主党協議会(つまりロシアのメンシェヴィキ党中央)は、「党の統一の維持についての決議」で、グルジア・メンシェヴィキの路線を「外国の援助とロシアからの分離を志向するという犠牲を払う」ものとして、厳しく批判した。

ザカフカスの三つの民族派政権のもとで係争地をめぐる対立は国家間の戦争にいたった。1918 年 12 月-19 年初めのアルメニヤ・グルジア戦争に際して、ゾラビヤン(ズラボフ)はジョルダニヤ宛公開状を出して、グルジア国内でのアルメニヤ人抑圧など、グルジア・メンシェヴィキ政権の排外主義的政策を

弾劾した。

(5) グルジア共和国とソヴェト・ロシアの対立は深まり、1921年2月赤軍がグルジアに侵入しソヴェト権力が樹立され、メンシェヴィキ政権は亡命した。

ソヴェト・ロシアとの関係、最終局面での交渉をめぐる党内論争があり、グルジアのソヴェト化は国際的な論争もよんだ。

『グルジア・メンシェヴィキ(論文と史料)』に、グルジア・メンシェヴィキ政権の亡命直後のアピール「すべての社会主義党派と労働者組織にむけて」(コンスタンチノーブル、1921年3月27日)を訳出した。

このアピールに関して「グルジア・メンシェヴィキのポリシェヴィキ理解」の問題に限定して、史料解題を付した。

冒頭でアピールは、ポリシェヴィキにはグルジアのソヴェト化をめぐる「二つの潮流が存在した」として、「国内的な蜂起=中央ロシアのポリシェヴィキ」と「ロシアの武力によるソヴェト化=カフカスのポリシェヴィキ」という二項対立の把握を打ち出している。

この把握は、これまで筆者が歴史的に検討してきたポリシェヴィキ内の路線の分岐、対立とはあきらかに大きく異なっている。

赤軍の軍事的介入によるグルジアの革命という路線を再三再四主張していたのは、カフカスにおける赤軍の指導者オルジョニキゼであり、その背後のスターリンであった。

モスクワの党中央ではこの突き上げを抑制する決議が重ねられており、トロツキイがもっとも強く反対していた。

もとよりスターリン、オルジョニキゼはともにグルジア人であったのだが、両者の赤軍の軍事的介入によるグルジアの革命という路線とその独走の結果としての1921年2月の赤軍のチフリス入城、それ以降のオルジョニキゼのカフカス統治の手法にたいして、現地グルジアのポリシェヴィキは激しく批判し抵抗していくことになる。

これまでの筆者の考察を、その根拠となるアルヒーフ史料とともに、再確認して、

「こうしたポリシェヴィキ側のさまざまな史料にてらしてみると、亡命直後のグルジア・メンシェヴィキ政権のアピールにみられる彼らのポリシェヴィキ把握の浅さを問題とせざるをえない」と指摘した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

高橋清治「メスヘチ地方からの民族強制移住」『スラヴ文化研究』第7号、2008年3月、pp.76-92.

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 1 件)

高橋清治『グルジア・メンシェヴィキ(論文と史料)』東京外国語大学、2009年、36 pp.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

6 . 研究組織

(1)研究代表者

高橋 清治 (TAKAHASHI SEIJI)

東京外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号: 30126106

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし